

たくみ

Craftsmanship

特集 民藝運動の作家と職人の仕事展
併催—巨匠作品特別展示—

第29号

倭寇わこうの話

安部晋三首相になって日韓首脳会談も行われ、さらなる日韓友好の一步が踏み出されたことは悦ばしい。だが、日韓の真の相互理解ということになるとなかなか難しいところがある。

古代、飛鳥から天平時代に至るころ、あれほど政治的、文化的に影響を受け、朝鮮半島から多数の優れた渡来人を受け入れてきた日本であったが、韓国の高校の国定歴史教科書、「韓国の歴史」(日本語訳)を読むと、高麗時代以降、現代に至るまで日本に対する好意的、友好的記述はまったくない。

これはもとより豊臣秀吉による朝鮮侵攻(壬辰倭乱)や近代における日露戦争、日韓併合など、日本側からの明らか敵対行為が原因であろう。

しかし以前から気になっていたことは、朝鮮半島との関係における倭寇の存在である。十四世紀の南北朝時代(高麗末期)からの倭寇による半島へ

の断続的な侵攻は政治的、経済的両面で彼の国の体制を脅かし、さらには壬辰倭乱を導いたのであった。

近年の学界での研究で、倭寇が必ずしも日本人だけでなく、朝鮮南部の人々や中国大陸沿岸の商人や漁民を多く含むことが明らかになったが、それにしても歴史資料に見るように倭寇の頭領は九州の宗(対馬)、松浦(平戸)、五島(長崎福江)、あるいは瀬戸内や四国の豪族であったことが知られる。

大三島神社へ奉納の大絵馬(大船の図)に「大日本海賊大將源朝臣村上のなにがし」などと大書されているのが散見されるが、南北朝から室町、戦国時代に至る覇権争奪の過程で、有力武将や津浦、島嶼の漁民たちが、時により密貿易者や海賊と化したことが窺えるのである。朝鮮半島や中国沿岸の人々にとっては甚だしく迷惑なことであつたのはいうまでもない。

(志賀直邦)

たくみ特別展

民藝運動の作家と職人の仕事展

会 期 平成十八年十二月二日(土)～十四日(木)

十二月三日(日)、十日(日)は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)

【出品品目】

陶 益子、瀬戸、丹波、出西、砥部、小鹿田、薩摩、沖繩垂屋ほか
布 久留米緋、房州唐棧、紬着尺、ホームスパン、海外の布
雑 漆器、鳥取の木工家具、古作柱時計、皆川マス、山下清作品
本 美術工芸関係図書、図録、「工藝」「民藝」「民芸手帖」など

● 併催 ― 巨匠作品特別展示 ―

十二月六日(水)より同会場にて巨匠作品を特別展示いたします。

【出品作家】

柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司、富本憲吉、バーナード・リーチ、
芹澤銈介、棟方志功、船木道忠、船木研児、金城次郎、合田好道

柳宗悦の名著『手仕事の日本』に記載されている民藝品は八百数十種にのほり
ます。創業以来たくみはその多くを取り扱い、さらに民藝運動に志を寄せる作家
の作品も店頭を飾りました。このたびこれらの古作、旧作を蒐めお目にかけます。
今なお生活を彩り、潤いを与えてくれる品々ばかりです。ぜひご覧ください。



赤絵蓋物(鈴木繁男)



色絵六寸皿(合田好道)



軸装女人図 (棟方志功)



松絵かめ (二川古作)



岩芝かすり (栃木県)



柱時計 (海外古作)



マタタビはげご (石川県)



呉須赤絵飾皿(芹沢銈介図案)



鉄葉茶碗(河井寛次郎)



辰砂蓋物(河井寛次郎)



柳文水差(リーチ、濱田、河井合作)



スリップ手角皿(船木道忠)



ピッチャー(船木研児)

杉岡泰さんを偲ぶ

大月 一清

清流と緑が美しい高梁川を眺めながらJR倉敷駅から伯備線の電車で約三十分、備中高梁駅に着く。拙宅はそこから北へ徒歩七分の交差点を左折して二軒目。その拙宅からも見える東南の山に自動車のループル橋がうねっていて岡山自動車高速道のICに至るが、



杉岡泰さん(平成3年8月)

車で十分も登れば高梁市松山榎井(ならい)という部落に入る。静かな草深い風景が深まり、そこに構えの堂々とした屋敷の杉岡泰(ゆたか)さんの生家が残る。

杉岡さんは一九〇六年(明治三九年)の生まれ。その榎井の家から備中山城山麓の内山下にある旧制県立高梁中学校(現県立高梁高校)へ、毎日徒歩で往復二時間を二年間通学。「だから僕は脚だけは丈夫なんだ」と自慢しておられた。私もその道を歩いたことがあるが、今でも猪や猿が横行する起伏の多い山道に疲労困憊であった。旧制県立高梁中学校は私の母校でもあるが、猫や杓子も高校へ進学する現在と異なり、当時の榎井部落から通学する者は杉岡さん一人であったと思う。独りその山間渓谷を歩きつつ、日々杉

岡さんは何を考え、何を夢見ていたであろうか。

一九二一年(大正一〇年)、杉岡さんは岡山市に出て彫刻を学び、二年後には東京へ。二松学舎に入って漢学を学び、小室翠雲の画塾で南画を修得。翌年から日本南画院展連続入選。十九歳という若さで新進画家として注目される。

その後、柳宗悦の『工藝の道』と出会い、「有名は、無名に勝ることができない」と、いったん筆を折る。昭和十七年には柳宗悦の民藝運動に身を投じ日本民藝協会事業部長。大戦末期海軍の軍属としてボルネオなどへ。

戦後復員して、大原総一郎に迎えられる「民藝品の店こそ、民藝美の理解と浸潤を図る、民藝運動展開の重要な担い手である」という提唱に応え、岡山県民藝振興株式会社の社長に就任。逝去まで全国から海外まで駆け回り、天満屋岡山の民藝店を全国屈指の存在に

高めて活躍。筋目正しい民藝品流通に献身。さらに大原總一郎、外村吉之介に続く岡山県民藝協会会長に就任、倉敷民藝館常務理事も兼ねて、外村吉之介を助けるなど、岡山県の民藝運動に果たした業績は大きい。

杉岡さんの後、岡山県民藝協会会長に就任した三宅登志夫氏は「杉岡会長が亡くなられた訃報に接した時は思わず息を呑み、何もかもが真っ白になってしまいました。暫くして思い出すことは、唯々温かく深い懐に甘え甘えて四十年近い年月が経っていたということだけ。さぞご迷惑だったことと察します。今更悔やんでも詫びても追いつくわけがなく断腸の思いをしています。かけがえのない方を失いました」と。

更に、五代目会長の金光章氏は「杉岡さんはどんな甘えでも温かく受け入れて下さる慈父のような徳を備えた人だった」と追悼の言葉を述べ、その珠玉のような杉岡さんの遺稿を纏め、手

間と苦勞を惜しまず、杉岡泰民藝随想集『有意無為八十年』を出版。平成六年の杉岡泰さんの一周忌に美しい柚木沙弥郎のカバー装画で「霊前に供えた。その本の一節に「民藝論は、美醜を超えた醜の対峙を容さない不二の美への教えである。…不敏とはいえ私共のように半世紀を民藝と共に歩んだものには、その間における些かの矛盾も転回も感じない」と、柳宗悦美論の深さをつよく明示している。

杉岡さんを追慕する人は地元止まらない。平成五年五月、岡山市の浄土真宗清寺の杉岡さんのご葬儀で、僭越ながら私が代表で弔辞を読んだ。その間微動だにせず聞き入っていた奥村正さんの佇立の姿が忘れられない。東京南青山のべにや民藝店の奥村正さん。民藝店を開いた当初、全国どの民藝品産地へ行っても相手にされず、やっと杉岡さんの紹介で現在の店を育てることができたという。「私は東京生

杉岡さん、外村先生との御縁

平成元年(一九八九)のことであった。前の年秋田五城目での民藝夏期学校で私が「民藝と流通」と題する講義をしたあと、外村吉之介先生からその内容がとても良かったとの言葉を頂いた。

そして翌二年に倉敷で行われる民藝協会全国大会で「民藝運動と流通」というテーマで分科会をしたい。ついでには杉岡泰岡山協会会長とも相談の上、その企画と総合司会を志賀さんに頼みたいとお話であった。身に余ることで自信がない、と申し上げると、外村先生は、自分も昔に柳宗悦先生から急に講演の代理を仰せつかり、自信がないと辞退したことがあった。するとやる努力もしないで出来ないとはどういうことか、と柳先生から徹しく叱られたと語られた。私は今でも、事あるたびにこのときの外村先生の言葉を思い起こすのである。

(志賀直邦)



硝子絵「スペイン白壁の村」(1979年・杉岡泰)

まれ。学童疎開した信州が第二の故郷。杉岡さんの岡山は、私の第三の故郷のように大切です」と言って、杉岡さんと同じ岡山県の私は、東京に出る度に奥村さんの手厚い接待を受けている。また、東京銀座たくみの志賀直邦さ

んが第一回の倉敷民藝館賞候補に杉岡さんの岡山県民藝振興会社を推薦してくださったこと。

横浜、巧藝舎の小川泰範さんが杉岡さん没後も天満屋の現代日本民藝展に毎年出品を続けていることなど。こうい

う杉岡さんを追慕する人は全国に多い。

杉岡さんは還暦を迎えて再び筆を執る。雅号は鬼無里隠士雲外。その硝子絵や南画は三宅登志夫氏が「杉岡さんは大人(たじじん)」という言葉その儘のお人で、作品には自ずから人柄が滲み、縹渺とした空間に気品があり、多くの人を魅了した」というように、今も生きて語りかける。

拙宅にも芹沢銈介が絶賛した「スペイン白壁の村」や、「模倣印度仏伝民画」、「沖繩宮古島風景」などの硝子絵。紙本の「アツ

シジの修道院」、「エチオピア・ラルベラ岩窟寺院」などがあるが、何れも柳宗悦の『絵画論』に「模様煮詰まり装飾性を帯び工藝的な絵は見る人に、無限の想いを誘う」とあるように静かな気品の名作である。

杉岡さんは、一九九三年(平成五年)五月五日永眠。備中高梁の拙宅から徒歩三分の浄土真宗正善寺の静かな墓地に眠っていて、墓碑には「南無阿弥陀佛、鬼無里隠士雲外杉岡泰、観法院釈泰然居士」と刻されている。

つい先日(九月十一日)、金光章会長他五人の方々とお参りしたが、皆さん追悼の念にふけり、容易に立ち去らなかつた。特に会長に就任して八年になる金光章氏は、万感の思いに墓前を離れようとしなかつた。私の心にも杉岡さんは、今も温の先輩、自然法爾(じねんほうに)の覚者として生き続けている。

(倉敷民藝館理事)

『月刊たくみ』 昭和十年十二月号紹介のこと

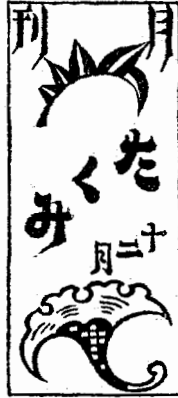
東京のたくみは昭和八年(一九三三)十二月十六日、西銀座に開店、翌九年七月十日株式会社として正式に登記された。たくみ創立の発端や詳しい経緯についてはいづれ稿を改めるが、創業の頃は一年余りの間に二人も店長が変わるなど苦難の時もあったようだ。

その頃のたくみの常勤社員はわずか数人で、開店時に濱田庄司先生の紹介で鳩居堂から入った鈴木訓治と、翌年鳥取の吉田璋也先生の推薦で三代目店長となった浅沼喜美が中心であった。しかし二人とも民藝品については素人に近く十分な知識も持っていなかったから、商品の仕入や価格の値入などは柳宗悦先生をはじめとする協会同人(日本民藝協会の設立は九年六月)の指導によったのだろう。

九年から十七年にかけての百貨店における多くの展覧会(松坂屋での全国

民藝展、高島屋での日本民藝展、琉球工藝展、現代朝鮮民藝展、三越での東北民藝展など十余回に及ぶ)も、だから凡て協会の先生方とたくみのスタッフ、それに百貨店の担当者たちの協同作業で行われたことが雑誌『工藝』や『月刊民藝』の記事などで分かる。

『月刊たくみ』も創刊は昭和十年頃だったようで、手元にその年十二月の『たくみ』をめぐる座談会と題する特集



「たくみ」をめぐる座談会(一) 半年振りにみた「たくみ」
芹澤 山本さんが前回御上京なさったのは。

山本 今年の三月でした。今度半年振りに店を見て、賑やかになったのに驚きました。第一に品物が豊富になった。

号がある。この座談会の出席者は、芹澤、柳悦孝両先生のほか、比木喬というのは柳宗悦先生の友人で商工省の高級官僚であった水谷良一氏のこと、山本龍藏氏は当時のたくみ社長、浅沼鈴木氏らはたくみのスタッフである。その頃の民藝の指導者達の思いや、民藝品の制作や販売の実情を知るのに最適な資料と思うので紹介したい。

(志賀直邦)

出席者 柳悦孝氏 山本龍藏氏

比木喬氏 芹澤銈介氏

浅沼喜美 鈴木訓治

十月二十九日夜 山茶寮

飾りつけも一変した。自然お客様も多いようですし、店の者一同も大変活気があるようです。

芹澤 河井(寛次郎)さんも今度の御上京で大変喜んでいました。

鈴木 買いたいものばかりだといっていられました。自分は持っているけれ

ど、誰かに上げてもいいからと云って、色々買って頂きました。

山本 店に入ってまず陶器が目につくようですが、やはり陶器の好きな方が多いのですか。

鈴木 多いようです。殊に男のお客様はほとんど陶器です。

山本 外で開く展覧会では割合に木工品や漆工品が沢山出ますが、店ではあまり売れないのはどうしたことでしょう。

柳(悦孝) 一つには数が少ないし種類も少ないせいではないでしょうか。もつと数を、殊に小物の種類を揃えることになれば自然お客様の目にもつき易く、勢い売れてくるようになると思います。

浅沼 河井さんが小品のデザインをして鳥取に送って下さるそうです。

山本 櫛盆など大変便利なもので、給仕盆にしても重宝なものです。作り方に欠点でもあって売れないというよ

うなこともあるでしょうか。

芹澤 盆が重いか厚いかという点が批判的になつていようですが、一般に鳥取の作品は、鳥取の方々が倦ま

ずたゆまず新しい品を作つて送つて下さるのには大変感服もし、嬉しくも思つていのですが、最近特に「鳥取流」というようなものが出来てきて、一面感心するところもありますが、反面に面白くないところも現れています。

柳 たしかにそうです。鳥取の新作は全体に膨らみが眼につく。それが内からの力が溢れて膨らんだのではなくて、外から強いて肉をつけたと云う感じ、工人が一つの型に安心して「この手ゆけばいいのだ」と云つた感じがあるようにも思われます。

山本 濱田さんもこの春の鳥取新作展に対して同じような批評をして下さいました。

比木(水谷良一) 濱田さんはちょうど今日鳥取に行っている筈です。倉敷、

出雲、牛の戸と一まわりして、色々注意を与えている筈です。

作家と民藝

比木 私がいつも作家に要求している点は、装飾品を多く作らないで、身近いものを多く作つてほしいと云うことです。抹茶碗よりも土瓶や飯茶碗を、染物の額や掛物や襖などよりも着物や風呂敷をと、身に近いものをもっと多く作つてもらいたい。

芹澤 作家としてもそれをやりたいのは山々なのですが、体に近いものは個人の力ではとても出来ない。どうしても集団の力でなくては出来ないことをつくづく感じます。安来でも鳥取でも、着尺、風呂敷、帯、タオル、ネクタイなどドシドシ作つて来ますが、あの力

でなくてはとても出来ないことです。比木 しかしあなたの風呂敷が出来てくれないと吾々は困る。だが、事実は、あなたの風呂敷ではとても品物が結構すぎるし、また値段の上からも使いき

れないと言う事もあるので、手本を出して鳥取でドシドシ作らせてはいかがです。作家は失敗してもいいからまず試みるべきだ。その後始末—すなわち手本を超えた格を持った作品を産んでいくことは民藝がやってくれる。だが作家がまず刺激しなければ民藝は興らない。

芹澤 それで私も最近鳥取と密接な連絡をもって、手本を出すことにしています。

浅沼 最近芹澤さんの手本で新しい帯止めが出来てきました。

柳 実際、自分の試作を繰り返しられる工人があると、自分の方も助かるし、やがては手本を超えた地染物が生まれて今度は自分の方の勉強にもなります。只心配なのは、工人が果たして充分にこちらの意図を飲み込んでくれるかどうかで、離れているだけに気になります。作家がいい手本をだし、工人がそれを忠実に素直に真似てくれれば

ばいいが、工人の意匠が先に立つようでは困るのです。

芹澤 そして出来たものはあせらずに是で充分だと云うところまで批判を仰ぐことです。新作の一番危険な点は、売れることをあせり、又売ればそれでいいと考えてしまうことです。「たくみ」は単に売れることを求めるのみではなく、いいものを求めているのです。そしていいものは又必ず売れてゆくので、物、物の出来そのものを第一義にすることです。

比木 吾々が一番困るのは、個人作家の作品を目で見た上で感心して買って来るのだが、さてそれを日用雑器として使う段になると、いちいち神経を使わなければならないので、やりきれない。こんな使い方、暮らし方は間違いではないかとさえ最近考えます。それにつけても民藝が作家と密につながりをもつていいものを数多く、かつ種

類多く作ってくれば、気安く使ってもゆけるだけでも助かる。

「たくみ」と流行

比木 それからこれは以前から考えていることだが、今の流行というもの、これについて作家の方々はどんな風にお考えですか。勿論自分の道をわき見しないで進めばいい訳ですが、それだけでいいものでしょうか。

芹澤 全く違うものとして目をつぶっているのではなくて非常に面白いものだと思つて眺めています。

柳 わきで見えていて随分楽しむことが出来ます。

比木 私は今一歩進んで、いまの流行というものは河井さんのいわゆる、買手の「身体から出た好み」から来たものではなくて、デパートの商業主義が作り出したものだと思う。ですから、毎年毎年趣向を変えて、去年のものを無駄にさせようとする。いきおい、なるべく見てくれがよく、値が割安で、

しかし丈夫でないものがドシドシ作られる。民衆は只それにあやつられていくといった状態だと思ふのです。

だが「たくみ」に来る客は、それに満足し切れなくて、自分の「身体から来た好み」で品物を選ぶ人たちでしょう。ゾムバルトは「奢侈と資本主義」の中で、マダム・ボムバドゥール式の奢侈の先駆たる宮廷女性にクリティザーネ（批判家たる女性の意味）の称呼を与えています。クリティザーネ達でもやはり自分の身体から割り出して新しい衣裳の好みを作り出し、それが当時の流行を指導してきたのです。

外国では中世の宮廷から流行が生れたけれども、かつてのわが国では、このクリティザーネにあたるものは町の職業婦人だったとおもう。寛政の町芸者、弘化の柳橋芸者、明治の新橋芸者など、たしかに自分の「身体から来た好み」で服飾品を選んで来たと思ふの

です。全くそれらの人々の発達しきつた感覚には素晴らしい所があるが、未期的なデカダン趣味と結びついているために、救いのない墮落をしています。

今ここで、ほんとうの流行が生まれなければならぬ。今の人たちはもう一度商業主義の流行から離れて、自分の本来の姿にかえり、自分の眼、自分の「身体」で選ぶことによつて流行を置き換えるべきだと思います。そのためには不十分なながらも「たくみ」があるし、「たくみ」は又そのような覚悟で充実しきつた力がなければならぬと思ふのです。

浅沼 大変ありがたいご意見です。過日埼玉の越生で織り手達が古い着物を見せてくれましたが、八十幾歳のお爺さんが、その親から譲られた着物を今胴着に仕立て直しているとか、やはり六十幾歳のお爺さんが、母親が嫁入の時持参した銘仙を今自分の丹前にしていると云う事実を見ました。皆丈夫で

綺麗だと思いました。

こうしたものを見ると、今の一般呉服がちつとも使い手に対する思いやりや温かい心遣いがなく、弱々しくて見ていられない時があるのです。あんな着物は古くなつてからおしめにも使えないだろうと思ふことです。店の現在はまだまだ品不足ですが、大いに心がけてやつていきます。

模倣の問題

比木 模倣の問題をどう考えますか。
芹澤 一般のものよりはましではないかと考えています。

柳 気にはなるが、神経質になつてはいけないと思つています。然しリーチさんは反対でした。

比木 国民性にもよるのでしようが、それによつて一般の文化水準が高まれば、それでよくはないでしょうか。作家は自分自身にはあくまで厳正でなければならぬが、他人には寛大であつていいと思ふ。

(つづく)

たくみ歳時記 日本の凧

男子にとつて正月の風物詩といえは
何といつても凧揚げだが、新潟の凧合
戦は端午の節句の祝行事で三百年の歴
史があるという。古くは「紙鳶」など
といい、のちに「とんび凧」「いかの
ぼり」「また長崎では「はた」とよん
だ。

長崎の「はた」は十字形の骨に切合
わせ模様を貼った菱形で、四、五、
六月の祭礼には「はた揚げ」を行い、



新潟県三条六角凧(中) 五、七七五円

かつてはビードロよまと呼ぶ、ガラス
粉を塗った糸をからませて切り合いを
する風習が盛んであった。

凧は日本各地にあつて、その形状、絵
や模様など土地土地の特色があるが、
凧揚げの風習が廃れるにつれ、伝統の
凧作り職人が消滅しつつあるのは淋し
い。しかし新潟三条の須藤さんは六角
形の武者絵凧を今なお作る。津軽や南
部、土佐などの武者絵の凧も佳いが、
三条のは縦の骨を外すと丸めることが
出来、大作でも持ち運びに便利で、凧
合戦の盛んな所以でもあろう。(S)



長崎県福江バラモン凧(中) 七、三五〇円

あとがき

昭和初年にはじまった民藝運動は、
日本民藝館や協会、たくみなどの設立
によつて、より活動の幅が拡がり全国
的な展開を見せた。そういつた中で、
柳宗悦先生たちの手足として各地でそ
れぞれに役割を担いながら、その一生
を民藝の普及に捧げた多くの先達がお
られた。

倉敷の大月一清氏が今号に追憶の文
を寄せた杉岡泰氏もその一人である。
杉岡さんやたくみの創設者であつた吉
田璋也先生だけでなく、青森の相馬貞
三、盛岡の及川四郎、東京の山口泉、
松本の丸山太郎、福岡の野間吉夫、沖
縄の喜久山添采氏ほか枚挙に暇がない
が、それらの方々的事蹟についても折
を見て紹介したいと思う。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一

二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)